

## 再解釈, 顕在化, 多重解釈

— ロシア語の‘2’‘3’‘4’と名詞の結合パターンの変化について —

三 谷 恵 子

0. 統語構造の通時の変化において、外的要因となるものが言語接触であるとすれば、再解釈 reanalysis<sup>[1]</sup> は内的要因の中軸をなすものといえるだろう。(“再解釈”の定義については2.3で述べる)。かりにある言語が、その通時の変化の中で言語接触などの外からの影響をまぬがれたとしても、内因的に生じる再解釈は、時間の推移の中で常に起こる可能性を秘めている。とはいえ、いかにして再解釈が生じたのか、あるいは再解釈やその拡張 extention であると説明されるものがはたして実際にその通りなのか、また、その結果得られた形式がどのようにして新たな統語構造として定着していくのか、といった事柄を具体的な変化のプロセスに即して明らかにするのは、必ずしも容易ではない。本稿では、ロシア語の2~4を表わす数詞における‘数詞+名詞’の結合パターンを取り上げ、統語構造の変化の中での再解釈の役割と、変化が進んでいく在り方について検討したいと思う。以下、1で現代ロシア語の数詞を含む表現の特徴について述べ、2でその通時の変化を考察する。

### 1.1. 現代ロシア語の‘2’~‘4’を含む数詞句の構造。

以下では、数の概念を表す語彙をまとめて“数詞”と呼び、数詞、名詞、形容詞などが結合して数量表現を表す句を、何が主要部であるかに関わりなく“数詞句”と呼ぶことにする。‘2’、‘3’のように表記した場合は数詞の2、3であることを意味する。また『数詞句が主格の場合』のような表現は、数詞句を構成する個々の要素の格形態に関わりなく、数詞句が句として統語構造の中で与えられる格について言及するものとする。

現代ロシア標準語(CSR)では、‘1’(один, одна, одно)は、結合する名詞の性・数[‘1’が複数をとる場合もある]・格に一致して変化し、‘1’を含む数詞句が主語である場合、述語も名詞と数・性で一致する。つまり‘1’を含む数詞句は、通常の“形容詞+名詞”の名詞句と同じ構造で、‘1’は主要部

名詞に対する限定辞として機能する。

‘21’, ‘31’, ‘101’, ‘121’ のように末尾が‘1’で終わる数詞にも‘1’の規則が自動的に適応される。ところが数詞が‘2’以上の場合、とりわけ、数詞が‘2’から‘4’までの結合パターンはいささか複雑になる。そこで、次節で‘2’から‘4’を含む数詞句の構造と、加えて‘5’の場合について簡単に述べ、そのような構造が生じた通時的背景の考察への端緒とする。具体的な事柄を述べる前に、次の2点を基本的な事実としてここで確認しておく。

(1) 数詞句の基本語順。

ロシア語の数詞句は基本的に

数詞[Q] - (形容詞[Adj]) - 名詞[N]

の語順で構成される。( ) は Adj が 0 個以上含まれることを表す。Adj の位置には指示代名詞や所有代名詞なども入りうる。指示代名詞や所有代名詞などの限定辞要素は以下の例文に対する注記では Det と記す。なお、上記の語順は固定的ではなく、Adj は Q に先立つこともでき、その場合には Adj の形態に若干の違いが生じる(後述)。また、Q が N に後置されることもあるが、その場合はしばしば「…ほど」のような意味を表わすと解釈される(три [Q] года [N] 「3年」—— года [N] три [Q] 「3年ばかり」)。この最後の場合に関しては、本稿では扱わない。

(2) ‘2’～‘4’と‘5’について以下に述べる文法的特徴、すなわち数詞句の構成や一致のパターンなどは、これらの数詞を末尾に持つ20以上の合成数詞(たとえば‘22’ двадцать два, ‘43’ сорок три, ‘105’ сто пять など)についてもおよそ当てはまる。また6以上20までの数詞に関しては‘5’について言えることが当てはまる。

1.2. 現代ロシア語の‘2’, ‘3’, ‘4’は次の表1のように格変化する。

〈表1〉現代ロシア語の‘2’, ‘3’, ‘4’

	男／中	女		
主格／対格	два	две	три	четыре
生格／前置格	двух		трех	четырёх
与格	двум		трем	четырем
造格	двумя		тремя	четырьмя

‘2’のみが主格およびこれと同形になる対格(以下“主格／対格”)のように記

ず) два, две の異形態を持ち, 数詞と結合する名詞が男性/中性の場合には два, 女性名詞の場合には две が選択される。その他の場合には異形態はない。

これらの数詞を含む数詞句の構成は, (1)数詞句が主格/対格の場合と, (2)斜格の場合とで異なる。

(1) 数詞句が主格/対格であれば, 数詞は主格/対格形をとり, かつ

男性/中性名詞は単数生格, 形容詞は (あれば) 複数生格

女性名詞は単数生格, 形容詞は (あれば) 複数生格または複数主格となる。たとえば:

два русских журнала

2 Adj[GEN.PL] N[GEN.SG.M] 二冊のロシアの雑誌

две молодые / молодых женщины

2 Adj[NOM.PL] / [GEN.PL] N[GEN.SG.F] 二人の若い女性

ただし, 指示代名詞などの限定辞[Det]や (やや有標な形式ではあるが) 一般の形容詞が数詞の前に置かれると, 名詞の性にかかわらずこれらは多くの場合, 複数主格となる (RG II : § 1817) :

эти два года                      この二年  
Det[NOM.PL]   2   N[GEN.SG.M]

потерянные четыре дня  
Adj[NOM.PL]   4   N[GEN.SG.M] 失われた四日間

cf. четыре потерянных дня

4 Adj[GEN.PL] N[GEN.SG.M]

数詞句が主語の場合, 述語の一致は, 名詞が活動体か不活動体によって若干異なる傾向を示す。不活動体名詞を含む数詞句に呼応する述語は基本的に中性単数形となる (なお, 現代ロシア語の動詞の過去時制においては, 複数で性の差異が関与的でなくなる。従って, 性について言及すれば単数であることを必然的に意味し, 複数では性に言及することは無意味である。以下でも, 動詞が過去の場合にはこの必要最小限の情報のみを記す) :

Две телеграммы пришло.

2[NOM.F] N[GEN.SG.F] v[PAST.N] 電報が二本来た。

ただし複数形をとることもできる:

Подкатили к амбару два грузовика.

v[PAST.PL] prep DAT.SG 2[NOM.M] N[GEN.SG.M]

倉庫にトラックが二台, 乗り付けた。

一方、名詞が活動体（人・動物）であれば、述語は複数形となることが多い：

Три учителя приехали.

3[NOM] N[GEN.SG.M] V[PAST.PL]. 三人の教師が到着した。

しかしこの場合も、中性単数形になることもある：

Пришло три красивых девушки 三人の美しい娘たちが来た。

V[PAST. N]

活動体名詞の場合にも不活動体名詞の場合にも、一致パターンを選択には、語順、主題性、数詞句に含まれる名詞の個別性、付加語の介在などいくつかの要因が関与していると考えられるが、この問題は本稿のテーマからはずれるので、ここでは詳細に述べることは割愛する。

(2) 数詞句が斜格の場合には、数詞句を構成する各要素はそれぞれ、当該の環境で要求される格形態をとり、名詞、形容詞は複数変化をとる、従って

主格：два русских журнала 「二冊のロシアの雑誌」

に対し

生格：двух русских журналов

2[GEN] Adj[GEN.PL] N[GEN.PL]

与格：двум русским журналам

2[DAT] Adj[DAT.PL] N[DAT.PL]

のようになる。

### 1.3. '5'の場合。

'5'は主格／対格 пять，生格／与格／前置格 пяти，造格 пятьюと変化する。

(1)'5'を含む数詞句が主格／対格の場合，'5'は主格，また形容詞ならびに名詞は複数生格になる：

пять интересных книг

5[NOM] Adj[GEN.PL] N[GEN.PL] 五冊の興味深い本

Он рассказал про пять интересных книг.

PRO V[PAST.M] prep 5[ACC] Adj[GEN.PL] N[GEN.PL]

彼は5冊の興味深い本について語った。

ただし'2'～'4'の場合と同様に、Qに対して前置されたAdjはしばしば、複数主格形になる：



〈表2：‘2’～‘4’と‘5’の構造〉

	主格／対格	斜格 (c*)
(1) 2～4	Q[NOM] Adj[GEN. PL] N[GEN. SG] または Adj[NOM. PL] Q[NOM] N[GEN. SG]	Q[C] Adj[C. PL] N[C. PL]
(2) 5	Q[NOM] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL] または Adj[NOM. PL] Q[NOM] N[GEN. PL]	Q[C] Adj[C. PL] N[C. PL]

\*Cは任意の斜格を表わす

больших камней 「巨大な石の山」や мешок яблок 「りんご一袋」といった句と同じ構造のように見える：

пять вкусных [GEN. PL] яблок [GEN. PL] おいしいりんご五個

мешок вкусных [GEN. PL] яблок [GEN. PL] おいしいりんご一袋

従ってこの範囲では、名詞の複数生格は、量化の意味を持つ数詞に後置されて構造的に現われる形式であり、数詞句は пять を主要部とする句で、形容詞の複数生格は名詞の複数生格に一致した結果、つまり

Q ПЯТЬ [GEN.PL ВКУСНЫХ ЯБЛОК]

という構造だと見ることができそうである。ただし、形容詞（特に指示代名詞や所有代名詞などの限定辞）が数詞に前置され эти пять яблок 「これら5個のりんご」のようになる（もちろんこれに対応した \*эти мешок яблок 「これら一袋のりんご」のような構造はない）場合には、形容詞は пять + NP[GEN] の句から外置されて、数詞句の格（主格／対格）ならびに、量化された句が意味的に表す複数性（+PL）の特徴に一致して複数主格形を得ると考えられる。：

Det<sup>NOM.PL</sup> ЭТИ [Q<sup>NOM</sup> ПЯТЬ [GEN.PL] ЯБЛОК]

ところで、“主要部名詞+（従属部）生格名詞句”という構成の名詞句では、主要部名詞がどのような格形式でも、これに従属する生格名詞句は生格のままである。たとえば мешок яблок 「りんご一袋」に対して

Он приехал с мешком вкусных яблок

prep(+INSTR) N[INSTR.SG] Adj[GEN.PL] N[GEN.PL]

彼はおいしいりんご一袋を持ってやって来た

となるが, 「袋」に一致して名詞句が同じ格形式になることはない:

\*Он приехал с мешком вкусными яблоками.  
prep(+INSTR) N[INSTR.SG] Adj[INSTR.PL] N[INSTR.PL]

一方, '5' を含む数詞句の斜格では句の要素すべてが同じ格になる。これは次のような, 名詞を主要部とし, 形容詞がこれに一致する名詞句のパターンである。つまり:

эти вкусные яблоки これらのおいしいりんご  
Det[NOM. PL] Adj[NOM. PL] N[NOM. PL]

に対し

Он приехал с этими вкусными яблоками.  
prep(+INSTR) Det[INSTR. PL] Adj[INSTR. PL] N[INSTR. PL]

彼はこれらのおいしいりんごを持ってやって来た

cf. Он приехал с пятью вкусными яблоками  
prep(+INSTR) 5[INSTR.PL] Adj[INSTR.PL] N[INSTR.PL]

彼は5つのおいしいりんごを持ってやって来た

ここから判断すると, 斜格の場合の数詞句は名詞を主要部とする名詞句であり, 数詞は名詞句に対する限定辞になっていると考えられる。

このように主格/対格の場合と斜格の場合で句の主要部が異なるとすることは, 理論的に首尾一貫性に欠けるように見えるかもしれない。この考えとは異なり, 例えば Babby (1985) では, 数詞句の格にかかわらず主要部は一貫して名詞であり, 主格/対格の場合においてのみ, 主要部名詞は数詞句 (Babby では QP) 内で生格を指定されるとしている (Babby: 102-103)。また, 別の解釈として, 主要部は常に数詞で, 斜格の場合には後続する名詞句に牽引 attraction が生じて主要部数詞と同じ格形式をとると見ることもできるかもしれない。どちらの解釈もしかし, 本稿で示した解釈より特に優れているとは思われない。実際のところ, '5' 以上の数詞を含む数詞句のこの奇妙な構造は, 2 節で詳しく述べるように, その通時的変化に起因している。ここで簡単に述べておくと, пять すなわち '5' などの数詞は元来名詞 (r-語幹型の女性名詞) で, 数詞句はその名詞つまり後に数詞となる要素を主要部とする名詞句であり, これに従属する生格名詞句は, 数詞句の格にかかわらず常に複数生格をとる構成であった。たとえば

пять [NOM. SG. F] яблок [GEN. PL]

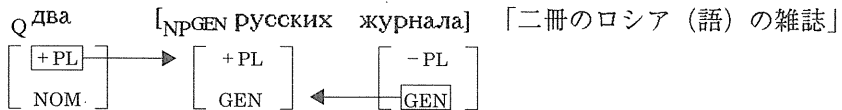
に対して造格:

## С ПЯТЬЮ [INSTR. SG] ЯБЛОК [GEN. PL]

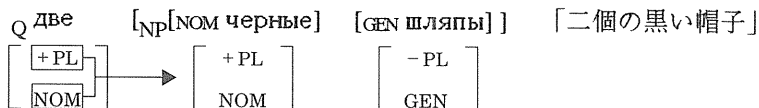
現代語のように、斜格において数詞に後続する名詞句が格変化するようになるのはだいたい16世紀以降である。つまり、主格／対格の場合には古い数詞句の構造が保持され、一方斜格の場合には、名詞を主要部とする名詞句型の構造に移行したことになる。この通時的変化を考慮するならば、格／対格の場合には数詞句の主要部、斜格の場合には名詞が主要部という解釈をとるのは妥当であろうと思われる。

次に(1)の場合だが、斜格では(2)と同じように名詞が主要部で、数詞は名詞の格に一致していると考えられる。‘2’～‘4’は通時的にも、元来、名詞に一致する限定辞であり、このパターンは‘5’以上のように変化を被った結果ではない。

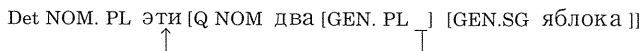
問題は(1)の主格／対格の場合である。(2)の主格／対格と同じように、数詞と結合する名詞の形態は生格だが、ただし単数生格である。(2)と同様に数詞を主要部と考えると、構造的には複数生格が出てくるはずだから、この形態は構造的ではなく、むしろ内在的に数詞から指定された結果と考えなければならない。名詞の単数生格を内在格とすると、これに一致すべき形容詞にはまた別の規則が働いていることになる。形容詞は複数生格形または名詞が女性名詞の場合には複数生格形で、主要部数詞(数に関して文法的には無標。ただし意味的に[+PL])と考えられる。格は主格／対格)と、名詞(単数生格)の文法特性にそれぞれ部分的に一致しているからである。形容詞の形態が導き出されるためには、次のような一致の関係が作用していることになる：



ただし две の場合には次のオプションがある。



また、名詞の性にかかわらず、形容詞(限定辞)が数詞に前置された場合は、(2)と同じように形容詞は複数生格になれる：



以上が、現代ロシア語の数詞句の標準的な構造である。これまでに示した事



柄について共時的に分析することは本稿の意図ではないので, 共時的な現象への言及は以上で終え, 先の表2に示した'2'~'4'と'5'を含む数詞句の構造を, 改めて表3にまとめておく。(表中のHは主要部, Dは従属部であることを示す。本稿では以後も同様)

〈表3: 数詞句の統語構造の解釈〉

	主格/対格	斜格
(1) '2'~'4'	два потерянных дня H <sub>Q</sub> D <sub>Adj[GEN. PL]</sub> D <sub>N GEN. SG</sub>	о двух потерянных днях D <sub>Q[C]</sub> D <sub>Adj[C. PL]</sub> H <sub>N[C. PL]</sub>
(2) '5'	пять потерянных дней H <sub>Q</sub> D <sub>Adj[GEN. PL]</sub> D <sub>N[GEN. PL]</sub>	о пяти потерянных днях D <sub>Q[C]</sub> D <sub>Adj[C. PL]</sub> H <sub>N[C. PL]</sub>

2. 0. 前節で'2'~'4'および'5'を含む数詞句の構造を共時的に見た。'2'~'4'を含む数詞句内の名詞だけが, しかも主格/対格の場合のみ単数生格で現われる事実は, 共時的には, 数詞がこの形式を指定するため, と説明できるだろう。一方, このような構造に至ったことには, 興味深い通時的背景がある。そこで本節ではその通時的面に焦点をあて, 実際にどのようなプロセスがあったかを考察する。なお, 以下で“古代ロシア語 (OR)”という語は, 最古期のロシア語, 特に本稿のテーマとの関連で言えば, 双数カテゴリーの消失が明確になる14世紀より前の文献に残されたロシア語を指す用語として用いる。

2. 1. '2'~'4'を含む数詞句の主格/対格形に現われる名詞の単数生格形は, 通常は, かつてあった双数主格の再解釈形と理解される。すなわち「'2'+双数主格」であったものが「'2'+単数生格」のように再解釈され, それが隣接する'3', '4'にまで拡張されたというのである。

スラヴ語の双数カテゴリーは, かつては名詞類, 形容詞類, 動詞において形態的に表示されたが, 後の発展の中で多くのスラヴ諸方言においてこの形態は失われた。今日, 双数を語形変化のパラダイムの中で保存しているのは, 南スラヴ語のスロヴェニア語と西スラヴのソルブ語 (基本的にはそのうちの上ソルブ語) のみである。そのほかのスラヴ語では双数は形態論的パラダイムから消滅し, たとえばクロアチア語/セルビア語で「手」「足」「耳」の複数生格にそれぞれ ruku, nogu, ušiju とかつての双数生格形が用いられるように, 特定の

語彙の中に“変則的な形態”として痕跡を残しているだけである。

双数を有していた最古期のロシア語（12～13世紀）における数詞‘2’～‘4’の形態は表4のように示される：

〈表4：ORの数詞2-4〉

	男	中／女	男	中／女	男	中／女
主	ДѢВА [dʲva]	ДѢВѢ dʲvĕ	ТРѢЕ/ТРѢЕ triĕ/ triĕ	ТРИ tri	ЧЕТЫРЕ četyre	ЧЕТЫРИ četyri
対	ДѢВА [dʲva]	ДѢВѢ dʲvĕ	ТРИ tri	ТРИ tri	ЧЕТЫРИ četyri	ЧЕТЫРИ četyri
生	ДѢВОЮ [dʲvoju]		ТРИИ (ТРЕЕ, ТРИ) trii (triĕ, tri)		ЧЕТЫРЬ (ЧЕТЫРЬ) četyrʹ (četyrʹ)	
与	ДѢВѢМА [dʲvĕma]		ТРЕМЪ (ТРЕМЪ) trĕmʹ (trĕmʹ)		ЧЕТЫРЬМЪ (-ЕМЪ) četyrʹmʹ (-emʹ)	
造	ДѢВѢМА [dʲvĕma]		ТРЕМИ trĕmi		ЧЕТЫРЬМИ (-ЕМИ) četyrʹmi (-emi)	
前置	ДѢВОЮ [dʲvoju]		ТРЕХЪ (ТРЕХЪ) trĕhʹ (trĕhʹ)		ЧЕТЫРЬХЪ (-ЕХЪ) četyrʹhʹ (-ehʹ)	

現代語とは異なり，‘3’，‘4’の主格にも異形態がある。この異形態は‘2’の場合同様，数詞と結合する名詞が男性名詞であるか非男性名詞であるかによって選択される。数詞句が斜格の場合には，現代語と同様に性の対立は中和される。

変化パターンから見ると，‘2’は非人称代名詞の変化型に属し，双数変化語尾をとる。比較のために例示すれば，指示代名詞 ТЪ「それ」の双数変化は主／対 ТЪ(男), ТѢ(中／女), 生／前 ТОЮ, 与／造 ТѢМА となる。‘2’と結合する名詞，形容詞も双数形変化をとり，数詞句全体は当該の環境から要求される格の形態となる。数詞句が主語の場合，述語もまた双数形で一致する。次に挙げるのは12-13世紀の例で，順に主格，生格，造格である (DRG 1995:268)：

ДѢВА      ДИГЛА      ВЪСИТЕОСТА  
2 [NOM] N[NOM.DUM.] V[AOR.3.DU] 二人の天使が天へと昇らせた  
ДѢВОЮ      СЕСТРОУ  
2[GEN] N[GEN.DU.F.] 二人の姉妹の  
СЪ      ИНѢМА      ДѢВѢМА      ЧЪРЬНОРЪЗЫЩЕМА  
prep(+instr) Det[INSTR.DU] 2 [INSTR] N[INSTR.DUM.]

その二人の修道士とともに

これは名詞を主要部とする名詞句の構造である。つまり1節で既に言及したように古代ロシア語では '2' を含む数詞句は、すべての格において名詞を主要部とする名詞句であり、'2' は名詞に一致する限定辞だったのである。

双数形の一致が守られて使用される例が十分に見出される一方で、双数の消失と、単数対複数という二項対立への数のカテゴリーの再編成への傾向は、早くも11世紀の文献から伺うことができる：

ВЫ НЕБЕЖЬНАЯ ЧЛОВѢКА ЮСТА (Борковский, Кузнецов :218)

[PL] Adj[NOMDUM] N[NOMDUM] [be.pres.DU]

あなた方(複数)は天上人であられる

ここでは本来双数形である *ва* に替わって複数形の人称代名詞 *вы* が用いられている。もちろん、多くの研究において既に示されているように、双数消失の進行度は文献や使用環境によって異なり、時代とともに均一な衰退を見せるといった性格のものではなかった。つまり、以下のような諸要件によって双数カテゴリーの消失度もしくは保存度は異なったのである

(1) 文献ジャンルの性質。一般に、聖職者によって書かれた教会文献は古風な特徴をよく残すことが知られているが、双数に関しても、実用文献などの世俗の文献ではほぼ完全に双数が失われた16—17世紀頃の文献でも“от обою раму”「両の肩から」；“до ногу”「両足まで」；“к родителма”「両親の元へ」など、ある程度規則的な双数形の使用が見られる(Горшкова, Хабругаев :158)。

(2) 範疇的要件。例えば人称代名詞は、その他の範疇がまだ双数を保っていた最古期(11—12世紀)に既に複数への置き換えの傾向を見せていた：рече женама. не боите вы са 「女たち二人に語った、あなた方は恐れることはない」(11世紀のオストロミール福音書の例)(Борковский, Кузнецов :218)。

(3) 数詞2の使用。同時代の同ジャンルに属する文献でも '2' を含む句やこれを主語とする文では双数形が保たれ、そうでない場合には複数への置き換えが起こる傾向性がある。たとえば次の1229年の文献では '2' を含む数詞句が主語の場合、述語も双数主格形である(Борковский, Кузнецов :218)：

ТА ДВА БЫЛА ПОСЛАТЬ ОШ РИЗѢ

Det[DUNOM] 2[NOM] v[DU.PAST] N[INSTR.SG] prep(+G). N[GEN.SG]

その二人(双数)はリーガの使節であった。

一方、同じ箇所、同じ主語(上の *та два*)に呼応する述語 *ехали* は複数である：

НЗ            рнгы            ехддн  
 prep(+G). N[GEN.SG] V[PL.PAST.PL]

(彼等は) リーガより赴いた (複数)

(4)語彙的要素。本来ペアになっているもの(目, 足, 肩, 角など)は双数形が使用される傾向があった。現代語でも бок「側」に対して бока́, берег「岸」に対して берега́; плечо「肩」に対して плечи́が複数主格となるが, これらは古い双数主格の名残とされる。

本稿はロシア語における, 形態カテゴリーとしての双数の消失のプロセスを論じることを目的とするわけではないので, 上記の諸要因について詳細に述べることは割愛し, 伝統的な歴史文法研究の見解に依拠してごくおおざっぱに, ロシア語においては13世紀にはすでに双数カテゴリーの崩壊(双数形の不完全な使用, 複数形への置き換え)が明白に見られるようになり, 16世紀には概ね消失したとしておく。

2. 2. スラヴ諸語の「'2'+双数形」という形式の運命は, 双数カテゴリーを保持したか否かでまず二つに分かれることになる。すなわち先に述べたように, 双数カテゴリーを喪失しなかったスロヴェニア語やソルブ語では, 「'2'+双数形」もそのまま存在意義が保たれ, 数詞句を形成する要素の個々の形態に変化は生じたものの, 古代教会スラヴ語とまったく等質の構造が保持された。参考までに現代の上ソルブ標準語の数詞2の形態とその結合パターンを表5に示しておく。

一方, ロシア語ならびに, ロシア語と同じく双数をやがて失うことになるその他のスラヴ諸方言では当然, 双数崩壊のプロセスの中で「'2'+双数形」という数詞句の形式も文法的意義を失うことになる。従ってここから次の段階への選択肢として, ①双数形に替わる別の形式が結合形として用いられる, ②既存の形式が再解釈され保持される, の二つが用意されることになろう。

第一の解釈, つまり双数形に替わり複数形が結合形式として用いられる—多くのスラヴ語は基本的にこのプロセスをたどった。ロシア語の変遷の特徴を明らかにするために, 以下に他のスラヴ語の例を簡単に述べる。

ポーランド語の'2'も15世紀頃までは dwa (男性) 対 dwie (非男性) という, 古い双数カテゴリーの対立に基づく二つの異形態を維持し, 2を含む数詞句が主格の場合 dwa chłopci「二人の少年」(男性活動体), dwa stoły「二個のテーブル」(男性不活動体), dwie żenie「二人の女」(女性), dwie lecie

〈表5: 上ソルブ語の '2' との結合の例 \*<sub>MP</sub> は男性人間形〉

	男性	非男性	〈例〉
Nom	dwaj	dwě	Dwaj młodaj mužje staj přištoj. 2[NOM] Adj[DU.NOM.MP*] N[DU.NOM:M] V[DU.MP*]
Acc	主/生	dwě	二人の若い男が来た
Gen	dweju		Dwaj wulkej štomaj stej stałoj. 2[NOM] Adj[DU.NOM] N[DU.NOM:M] V[DU]
Dat	dwěmaj		二本の大きな木が立っていた
Instr	dwěmaj		Dwě młodej žonje stej přištoj. 2[NOM] Adj[DU.NOM] N[DU.NOM:F] V[DU]
Loc	dwěmaj		二人の若い女が来た

数詞 2 には *dwaj*, *dwě* の異形態があり, 前者は結合する名詞が男性名詞の場合, 後者はそれ以外の場合に使用される。対格では名詞が人を表わす場合生格と同形 (*Widžu dweju mužow* 「二人の男を見る」), 人以外のもの (動物および不活動体) では主格と同形。述語は主格名詞句に一致する。

「二年」(中性) のように主格形の名詞と結合した。ポーランド語はその後の発展の中で男・女・中性の三文法性に加え, 複数で男性人間とそれ以外というサブジェンダーの対立を獲得したが, これに応じて '2' も *dwaj* および *dwóch* (または *dwu*) (男性人間), *dwa* (中性および男性非人間), *dwie* (女性) の異形態に分裂した。*dwa*[*dva*]から派生した *dwaj*[*dvaj*]は16世紀頃から現われた形態で, これより先に '3' の男性名詞複数形と結合する形式であった *trze* が15世紀頃に *trze* ([*tʃɛ*] > [*tʃej*] >) > *trzej* となったことの類推が及んだ結果とされる (Ананьева 1994: 215)。男性人間形のいま一つの形態である *dwóch* [*dvux*] (または *dwu*) は本来は生格形で, 主として '22' *dwadzieścia dwa* など, 末尾に '2' をもつ合成数詞が名詞と結合する場合に使用されるようになったものである。古い男性形の *dwa* は男性非人間名詞と結合する形態として残り, また19世紀までは男性人間形 *dwaj* の異形態としても機能していたが, 加えて中性名詞と結合する形式ともなった。これは *dwie słowie* [NOM. DU] > *dwie słowa* [NOM. PL] をへて数詞が名詞と同じ a-語尾をとるようになったためとされ, 17世紀以降に定着する形式である。女性形 *dwie* は古い形式をそのまま保った。

これらの '2' の異形態のうち *dwóch* 以外のものを含む数詞句が主格の場合, 結合する名詞句は複数主格, 述語も複数で一致する。すなわち

Q[NOM] Adj[NOM. PL] N[NOM. PL] V[PL]

の構造をとる。たとえば

Ci dwaj nowi studenci byli obecni.

Det[NOM. PL] 2 Adj[NOM. MP] N[NOM. MP] V[PL]

それら 2人の学生は出席していた (Comrie & Corbett : 749)

dwóch (dwu) が用いられると、結合する名詞句は複数生格形を取る。すなわち

Q (dwóch)[NOM] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL] V[SG]

となる：

Dwóch nowych studentów zostało wybranych.

2[NOM] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL] V[N. SG]

二人の新しい学生が選出された。

数詞句が斜格の場合には名詞、形容詞は当該の格の複数形になる。

ロシア語と同じ東スラヴ語に属し、ロシア語と構造的にもきわめて近いウクライナ語、ベラルーシ語でも、'2'を含む数詞句のすべての格は複数形と結び付くようになった。ウクライナ語ではこの形式は14世紀から現われたとされ (Sevelov : 235)、ロシア語と同じように双数カテゴリーの消失のプロセスと平行している。ところでウクライナ語の'2'を含む数詞句にはアクセントに関して興味深い現象がみられる。数詞句が主格の場合、'2'と結合する名詞は複数主格語尾を取るが、単数と複数でアクセント位置が異なる語彙においてはしばしば、単数のアクセントパターンを持つのである。たとえば син「息子」は単数で生格 сіна、与格 сіновіと語幹アクセント、複数で主格 сині́, 生格 сині́вと語尾アクセントになる移動タイプだが、この語が'2'と結合した場合には два сіни́と、語尾の形態は複数でありながら単数と同じ語幹アクセントになる。同じように дуб「オーク(木)」の複数主格 дубі́に対して два дуби́, сестра́「姉妹(女性名詞)」の複数主格 сестри́に対して дві сестри́, від рі́「バケツ」の複数主格 ві́драに対して два ві́драなど。Sevelovによればこうした語は双数も語幹アクセントであったという (Sevelov:235)。ただし現代語では、数詞句に現われる複数形名詞のアクセントを通常の複数名詞と同じアクセントにする傾向が広まっており、特に男性名詞ではそれが顕著であるとも指摘されている。

ベラルーシ語にもウクライナ語と同じ現象が見られる。つまり'2'を含む数詞句が主格の場合、名詞、形容詞は複数主格をとるが、単数と複数でアクセント位置の異なる名詞では複数主格語尾を取りながら単数アクセントのパターン

になる。ただしベラルーシ語の場合、この現象は女性/中性名詞に限られるようである。たとえば *вядро* 「バケツ」(中性名詞)は単数生格 *вядра́*, 複数主格 *вёдры* に対し *два вядры́, труба́* 「パイプ」(女性名詞)は単数生格 *трубы́*, 複数主格 *тру́бы* に対し *две трубы́* となる (Comrie, Corbett : 935)。ベラルーシ語のこの現象は、ウクライナ語で複数名詞が本来の複数アクセントパターンをとる傾向が男性名詞で顕著であることと同じ方向性の変化の結果である。

ウクライナ語, ベラルーシ語ともに, 数詞句が斜格の場合には名詞, 形容詞とも必要な格の複数形になる。

以上に示したように, これらの言語の '2' を含む数詞句は, 名詞を主要部とする名詞句であり, 数詞は名詞句に対する限定辞であるといえることができる:

主格 (およびこれと同形の対格) の場合

D Q[NOM] D Adj[NOM. PL] H N[NOM. PL]

斜格の場合

D Q[C] D Adj[C. PL] H N[C. PL]

現代ロシア標準語でも, 数詞句が斜格の場合には上に述べたスラヴ諸言語と同じく, '2' と結合する名詞, 形容詞は複数変化をとる。この現象は, 双数がまだ完全に失われていなかった時代の文献からも観察され, 双数から複数への置き換えが斜格でより早く進んだことを示唆するといえるだろう。次の例は14世紀の文献からのものである:

<b>нз</b>	<b>двою</b>	<b>моуѣ</b>	<b>перевьѣвз</b>	
prep(+gen)	2[GEN.DU]	Det[GEN.PL]	N[GEN.PL]	私の二頭の子馬から
<b>по</b>	<b>двою</b>	<b>лѣтѣхъ</b>		
prep(+loc)	2[LOC.DU]	N[LOC.PL]		

二年後に (Горшкова, Хабругаев: 274)

これに対して, ロシア語の '2' を含む数詞句の主格/対格は, 別の変化の道をたどった。それについて次に述べる。

2. 3. 2. 2. で示した二つの選択肢の第二番目は, 既存の「'2' + 双数形」という形式が再解釈を受け保持される, というものだった。「再解釈」という用語を, “基底にある統語構造のパターンを変えながら表層の出力形には変化をもたらしないうようなメカニズム” (Harris & Campbell : 50) と定義すれば, ロシア語の「'2' + 双数主格/対格」がたどった道はまさにこれにあてはまるといえよう。通常ロシア語史では, *стол* 「テーブル」の単数生格 *стола́* に対

し双数主格 *стола́* のように、男性名詞の多くを占める *o*-語幹型名詞の双数主格形が単数生格と同形であったことが誘因となって、‘*два* + 男性双数主格’ → ‘*два* + 男性単数生格’ と解釈されるようになり、これが定式化したと説明される。つまり表層の ‘*два* + *N-a*’ という形式はそのまま、基底では名詞が双数主格から単数生格に、また数詞句全体としては名詞を主要部とする名詞句から数詞 ‘2’ を主要部とする数詞句に変わったのである。そしてこの ‘*два* + 単数生格’ という再解釈形式は、*o*-語幹型男性名詞と単数生格語尾が同じになる中性名詞に拡張され、さらに形式上は関連性のない女性名詞にも及んだと考えられている。現代語では ‘2’ のみならず ‘3’ ‘4’ を含む数詞句の主格／対格形に現われる名詞すべてが単数生格となると定式化されるが、これも、‘2’ + *o*-語幹男性名詞において生じた再解釈が、顕在化 *actualization* (Harris & Campbell: 77) によって ‘2’ + 中性および女性名詞、さらにこれに隣接する ‘3’、‘4’ の場合にも及んだと説明される。したがって単純にこのプロセスを示せば、‘2’ を含む数詞句に関しては下の表 6 のような変化だったということになるだろう：

〈表 6：再解釈から出力形までの単純な図式〉

		M	N	F
OR	2+双・主	дѣва стола́	дѣвѣ селѣ	дѣвѣ рыбѣ
→ 再解釈	два+男・単生	дѣва стола́	↓	↓
→ 顕在化	два+単・生	↓	дѣва села	
→	2+単・生		↓	↓
CSR		два стола́	два села	две рыбы

いくつかの理由から、実際の変化はこれほど単純なものではなかったと考えられるが、いずれにしてもこの変化の結果、表 6 に見られるように、「‘2’ + 双数主格」の時代には“男性対非男性”という双数パラダイムの性対立に基づいた *dva/dve* の対立が、新たに“非女性対女性”という、名詞変化パラダイムに基づいた異形態となったのである。

なお、南スラヴ語のセルビア語／クロアチア語／ボスニア語の「‘2’ + 双数主格／対格」もロシア語と概ね同じ道をたどり、ロシア語と同じように *dva* と結合する男性／中性名詞は単数生格になった。一方、女性名詞は現代語の規則では複数主格になるとされる。ただしこれらの言語で女性名詞の複数主格と単数生格はまったく同形であり、実際の出力形式はロシア語と同じパターンに



なる。以下にこの結合パターンをクロアチア語標準形で示す (〈クロアチア語のパターン〉表を参照)。

## 〈クロアチア語のパターン〉

	主格/対格	生格
男	dva mlada momka 2[NOM] Adj[GEN. SG] N[GEN. SG. M] 二人の若い少年	dvaju mladih momaka 2[GEN] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL]
中	dva nova sela 2[NOM] Adj[GEN. SG] N[GEN. SG. N] 二つの新しい村	dvaju novih sela 2[GEN] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL]
女	dvije lijepe žene 2[NOM. F] Adj[NOM. PL] N[NOM. PL. F] 二人の美しい女	dviju lijepih žena 2[GEN] Adj[GEN. PL] N[GEN. PL]

2. 4. ロシア語では o-語幹中性名詞 село「村」, лѣто など, 本来なら '2' との結合では双数形: двѣ лѣтъ, двѣ селъ となるべきものが два лѣта, два села のような形で13世紀の文献 Новгородские грамоты на пергамене など にすでに見い出されている (Горшкова, Хабругаев:161)。ここから, два +N-a 語尾形が比較的早い時期から中性名詞の結合形としても用いられつつあったと推察できる。しかしこの変化のプロセスと, '2' と結合する形(中性 o-語幹硬変化では -a 語尾形, a-語幹型女性名詞硬変化タイプであれば -ы 語尾形)が「単数生格形」と解釈されるようになるプロセスとは完全には重ならないように思われる。

通常, 再解釈から顕在化を経て最終的な出力形に至る間には, “多重解釈 multiple analysis” と呼べる段階が考えられる。Harris & Campbell (81-82) に依拠して簡単に述べれば, 顕在化の過程の中で, ある期間, 問題の形式が複数の解釈を受ける可能性をもつことである。“多重解釈”の期間がどのくらい続くか, あるいは一義的な解釈に必ず収束するかは一般論的には予測できないが, 少なくともその状況下では, 当該の形式が再解釈以前の古い構造のまま理解されたり, あるいは別の再解釈から生じた顕在化の影響を受けるなど, 解釈の多様性が存在している。ロシア語における '2' ~ '4' を含む数詞句の変遷も, 実際

にはこのような多重解釈の段階を経て今日定式化されるような構成に至ったと考えるべきだろう。

2.4.1. まず‘2’を含む数詞句の場合については、男性名詞への再解釈のプロセスと、その顕在化するなかで中性、女性名詞への拡張という二つの事象を考える必要がある。男性名詞を含む数詞句主格形で ‘два + N-a’ という形が保持されたのは一つの歴史的事実である。双数消失の過程の中で、два に後続する男性名詞の形態範疇が不透明になり、ある話し手（あるいは書き手）が単純にこの形式を単数生格と解釈したということも実際には起こりえただろう。ただ、文献資料からこのことを証明するのは実際には困難である。まず第一に、アクセントがわからない古い資料では、残された形式が双数（の名残り）のつもりで用いられていたのか、単数生格形と再解釈されて使用されていたのかを判断することはできない。仮にアクセントがわかったとしても、双数主格と単数生格がアクセントも含めて同形になる語ではどうしようもない。名詞を修飾する形容詞が単数生格形で使用されるような例があれば、名詞が単数生格と意識されていたことの傍証になろうが、実際には単数生格形であることが一義的にわかる（つまり双数主格とは明らかに異なる -ого 語尾をとる）形容詞が現われるような例は見い出されないのである。いわゆる“名詞型語尾形”では形容詞も名詞と同じ変化語尾を取るのだから、男性名詞と一致する形容詞の双数主格形と単数生格形もまた、名詞の場合と同じく同形の -a 語尾になってしまう。あるいは、o- 語幹以外の男性名詞、例えば сынъ「息子」のようにもともと u- 語幹名詞であったものは、本来単数生格 сыну、双数主格 сына となるはずなので、два сыну といったような結合があれば、これは確かに два + 単数生格の結合パターンと見ることができる（もしそうでなければこの сыну という形は双数生格である）。そしてこのような結合が定常的に見い出されれば、そこから推測して два と結合する o- 語幹名詞の -a 語尾形も、双数形との単なる形式上の一致ではなく、単数生格と再解釈されていたと主張することができるかもしれない。実際、15世紀後半にノブゴロド出身の商人アフアナシ・ニキーチンによって書かれた『三つの海の彼方への旅行記 Хождение за три моря』の中には “а етовль подь городомъ два годъ” 「二年間町を包囲した」という例がある（“Хождение”：25）。годъ「年」は歴史言語学的には сынъ と同じく u- 語幹名詞に属する名詞で（Горшкова, Хабругаев：150）、理想的には году は確かに男性名詞単数生格形である。しかし、сынъ のように比較的後の時代

まで u- 語幹の変化タイプを保持した名詞も含めて, ロシア語では非常に早い時期から u- 語幹名詞と o- 語幹名詞の変化タイプの混同が生じており, やがて u- 語幹型の変化は o- 語幹型に吸収され, 基本的に消滅する。сынъ でさえ, у сына (GEN. SG) のような形ですでに12世紀から用いられている。つまり元来の u- 語幹名詞の単数生格形に-y ([u]) 語尾が安定して使用されたとは言えないのである。また, 逆に本来 u- 語幹でない名詞が u- 語幹型の語尾を取る例も少なからずある。このような状況の中で, два году のような散発的に見出される例をもって, 直ちにこれが単数生格形であることを示しているという結論は導き出せない。このアフアナシ・ニキーチンのケースに限って見れば, あるいは“双数主格”→“単数生格”という再解釈が生じていることを示しているのかもしれない。しかし同時に書き手による単なる書き誤り, 何らかの混同(たとえば双数生格形との混同)などの可能性も十分に考えられるのである。

このように, 男性名詞の -a 語尾が確実に‘単数生格形’と意識されていたことを示す手がかりがない一方で, たとえば現代語には шаг 「歩み」の単数生格 шага に対して два шага́, час 「時」の単数生格 часа́ に対して два часа́ のように, два と結合する場合の単数生格が通常の単数生格と異なるアクセントをもつ語がある。これは, 古い双数のアクセントがそのまま残ったもので, ‘2’ との結合形が単数生格であると定式化されてもなお, かつての‘2+双数形’がそのまま, つまり通常の単数生格とは差異化されて継承されたことを物語っている。この事実からすれば, 「два + 男性名詞」に関しては, 名詞の形式が双数主格から単数生格へと再解釈される過程の中で, 同時にこれが本来は「双数形」であるという解釈(あるいは意識)も長く人々の間にとどまったと考えて然るべきではないだろうか。双数が失われた後, とりわけ16世紀以後のロシア語においては, この形式は形態カテゴリーとしての双数形ではなくなった。しかし, ただちに単数生格形に移行したわけでもない。‘2’が持つ, 2 という数概念は双数の形態カテゴリーが失われても不変であり, その意味との連合で, 古い N-a 形は 2 と結合する場合に使用される特別な形式, “双数”と呼べなければ“小数主格形”の形式として, 多重解釈の中に存在したと思われる。この考えは数詞句の変遷にかかわる一連の事柄, すなわち①中性, 女性名詞の場合との関連, ②形容詞に複数形が現われること, ③‘3’, ‘4’への拡張, ④16世紀以後に現われてくる -á 語尾の男性名詞複数主格形, などを考慮しても矛盾しないばかりか, これらの事象を説明する手がかりにもなるのである。

2. 4. 2. 再解釈の顕在化により、'2'と結合する中性および女性名詞も単数生格になったというのが伝統的な見解である。最終的な出力形から見ればそのとおりであるが、ここでも多重解釈の状況を考慮する必要があるように思われる。

まず、古代ロシア語でも現代語でも、中性名詞、女性名詞の多くで単数生格(以下《単生》)と複数主格(以下《複主》)が同形になることに注目したい。たとえば o- 語幹型中性名詞であればどちらも -a 語尾, a- 語幹女性名詞であれば -ы 語尾になる: крыло 「翼 (中性)」 - 《単生》および 《複主》 крыла (ただし現代語では複数主格は集合形から転用された крылья が普通), рыба 「魚 (女性)」 - 《単生》および 《複主》 рыбы. ここから直ちに、単数生格と解釈される形式, 本稿ではもちろん '2' との結合形が問題となるわけだが、これが複数主格と解釈された可能性もあったという仮定がたてられる。むろん中性名詞でも女性名詞でも、(A) 単数と複数でアクセント位置が同じもの、(B) 単数と複数でアクセント位置が異なるもの、の両方の場合がある。上に例として挙げた крыло, рыба は (A) に該当し、この場合はいうまでもなく単数生格と複数主格は完全に同形となり、両者の関係は不透明になる。一方 (B) では表記上同形式となっても発音が異なる。たとえば現代語でこのタイプに属するものを挙げると

тѣло 「体 (中性)」 - 《単生》 тѣла - 《複主》 тѣла  
 сѣрдце 「心 (中性)」 - 《単生》 сѣрдца - 《複主》 сѣрдца  
 душá 「魂, 心 (女性)」 - 《単生》 душй - 《複主》 дѹши  
 землѣя 「土地 (女性)」 - 《単生》 землй - 《複主》 зѣмли

などがある。ここでは単数生格と複数主格の違いはアクセント上明白である。しかしながら方言やフォークロアテキストの分析から、古代ロシア語においては現代語と異なるアクセントパターンを持ったと考えられる語が見い出されている。実際、上に示した例のすべてが、かつては

сѣрдцѡ - 《単生》および 《複主》 сѣрдца  
 телѡ - 《単生》および 《複主》 тѣла  
 зѣмлѣя - 《単生》および 《複主》 зѣмли

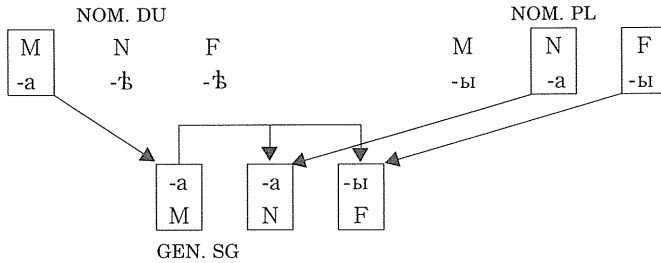
のように、単数と複数で同じアクセントパターンをとったと指摘されている (Bailey:1980)。中性、女性名詞の単数生格と複数主格がアクセントも含めて同形になる割合がどのくらいであったのか、という確率論的なことは別としてそのような語がたしかに複数あったという事実、しかもいくつかの、そのよ

うなパターンをとったと考えられる語彙は「体」「心」「土地」など基本的な、比較的よく使用される語彙であるということから、少なくとも次の主張ができるだろう。すなわち、現代語で単数生格と複数主格のアクセントが異なる語が数多く見出されるからといって、それが直ちに、この二つの形式の差異が過去においても常に明白であったという証拠にはならないということ、そしてその確率について言及はできないが、この二つの形式の関係が不透明になる状況は十分にありえたこと、である。

さて、双数カテゴリーが文法形式として意義を失っていく変化の中で、双数の意味は基本的に複数に吸収されていった。このことは一般的に考えても自然な推移であるし、ロシア語においては2.1.に示した人称代名詞の例や先の2.4.1の斜格の例で示したとおり、その兆しを11世紀頃からすでに検証することのできる不可逆のプロセスとして進んでいった。この事実、先に示した単数生格と複数主格との形式上の不透明性を考え合わせると、'2'と結合する中性、女性名詞が直ちに単数生格形になったと見るよりは、複数形、あるいは少なくとも複数の意味と何らかの関連をもった形式として使用されていたと考えるのが自然ではないだろうか。'2'と結合する男性名詞の場合は古い双数形と形式が同じであったことから、双数の名残りという意識が比較的長く残ったであろう。これに対し、中性/女性名詞では、単数生格という解釈が徐々に顕在化していく一方で、これと平行的に、複数性の意味との連合から複数主格という解釈も生じていたと推測できる。双数カテゴリーが消滅し、ロシア語の新しい文法体系が形成されていく時代（おそらくは双数消滅が明らかになる13世紀頃から現代語の規範が整ってくる17世紀頃まで）はこのような多重解釈の状態にあったと考えられる。現代でも一部の方言で、女性・中性名詞のみならず男性名詞においても2+複数主格形の結合が観察されるという（Горшкова, Хабругаев:274-275）が、これはまさしく多重解釈の状況から、標準ロシア語とは異なるパターンが選択された結果に他ならない。

再解釈と顕在化が進行する状況は、22ページのように図式化できよう（ここではそれぞれの性に代表的な o- 語幹および a- 語幹の語尾のみを示した。矢印は再解釈もしくは顕在化の方向を示す）：

このように考えると、先に述べたウクライナ語やベラルーシ語も、上で言及したロシア語の方言と同様、多重解釈を経て、'2'+複数主格の形式、つまり女性、中性形の一致のパターンの方を選択するようになったと見ることができる。そしてこれらの言語では、形態の上ではなくアクセントの上に、かつての



双数の意識を残したのである。

2.4.3. 次に形容詞の形態について考えてみたい。‘2’と結合する形容詞の形態と、名詞との一致関係は、1.2で見たようになりに奇妙である。ここで改めて古代ロシア語と現代語の主格と生格の場合を示すと、表7のようになる：

<表7：ORとCSRの数詞句の比較（【】内はCSR表記にしたもの）>

	OR			CSR		
主	дѣѡа	новѡ(ѡ)	столба	два	новых	столба
	【 два	новѡя	столба】			
	$D_2$ [NOM.M.]	$D_{Adj}$ [NOM.DUM]	$H_N$ [NOM.DUM]	$H_2$ [NOM.M.]	$D_{Adj}$ [GEN.PL]	$D_N$ [GEN.SG.M]
主	дѡѡѣ	новѣ(ѡ)	подруѣи	дѡѡ	нохых/новѡѡ	подруѣи
	【 дѡѡ	новѡѡ	подруѣи】			
	$D_2$ [NOM.F]	$D_{Adj}$ [NOM.DUF]	$H_N$ [NOM.DUF]	$H_2$ [NOM.F]	$D_{Adj}$ [GEN/NOM.PL]	$D_N$ [GEN.SG.F]
生	дѡѡѡѡ	новѣ(ѡ)	столбѣѣ	дѡѡѡ	новых	столбѡѡѡ
	【 дѡѡѡ	новѡѡѡ	столбѡѡѡ】			
	$D_2$ [GEN]	$D_{Adj}$ [GEN.DU]	$H_N$ [M.GEN.DU]	$D_2$ [GEN]	$D_{Adj}$ [GEN.PL]	$H_N$ [GEN.PL]
生	дѡѡѡѡѡ	новѣ(ѡ)	подруѣѣѣ	дѡѡѡѡ	новых	подруѣѣѣ
	【 дѡѡѡѡѡ	новѡѡѡѡѡ	подруѣѣѣѣѣ】			
	$D_2$ [GEN]	$D_{Adj}$ [GEN.DU]	$H_N$ [GEN.DU]	$D_2$ [GEN]	$D_{Adj}$ [GEN.PL]	$H_N$ [GEN.PL]

‘2’を含む数詞句が斜格の場合、例えば表中のORの生格形：дѡѡѡѡ новѡѡ(ѡ) столбѡѡ「二本の新しい柱の」に替ってдѡѡѡѡ новых [GEN. PL] столбѡѡ [GEN. DU]のように複数形の形容詞を用いた例が初期の文献から知られており、

双数形から複数形への置き換えが名詞と平行的に、あるいはむしろ名詞に先立って進んでいたと考えられる。従って双数の消失とともに斜格では形容詞も名詞も複数形をとるようになり、現代語のパターンができ上がったとみなすことができそうである。これに対し、主格/対格の場合は状況が錯綜している。単純に、斜格の複数性[+PL]が主格にも拡張されたとするなら、形容詞は複数主格形になってもよさそうなものであろう。確かに名詞が女性名詞の場合には表7の подруги 「女友達」のケースのように複数主格形の形容詞を使用することもできるが、これは女性名詞の場合のオプションで、基本的に形容詞は複数生格である。この形式が生じた背景には、'5'以上の数詞句の影響があると考えなければならない。

すでに1節で言及したように、古代ロシア語の'5'以上の数詞は、現代語と同じく複数形の名詞、形容詞と結合したが、ただしすべての格で、数詞のみが格標示を担い、数詞句に含まれる名詞、形容詞は常に複数生格であった。現代語との対比のためにこの関係をまとめて表8に示す：

〈表8：'5'を含む数詞句の構造の変化〉

	OR			CSR		
主	пять	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> ов	пять	новы <u>х</u>	стол <u>б</u> ов
	{пять	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> овъ}	H <sub>5</sub> [NOM]	D <sub>Adj</sub> [GEN.PL]	D <sub>N</sub> [GEN.PL.M]
生	пяти	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> овъ	пяти	новы <u>х</u>	стол <u>б</u> ов
	{пяти	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> овъ}	H <sub>5</sub> [GEN]	D <sub>Adj</sub> [GEN.PL]	D <sub>N</sub> [GEN.PL.M]
与	пяти	вкусны <u>х</u> ъ	ры <u>б</u> ъ	пяти	вкусны <u>х</u>	ры <u>б</u>
	{пяти	вкусны <u>х</u> ъ	ры <u>б</u> ъ}	H <sub>5</sub> [NOM]	D <sub>Adj</sub> [GEN.PL]	D <sub>N</sub> [GEN.PL.F]
主	пяти	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> овъ	пяти	новы <u>х</u>	стол <u>б</u> ов
	{пяти	новы <u>х</u> ъ	стол <u>б</u> овъ}	H <sub>5</sub> [GEN]	D <sub>Adj</sub> [GEN.PL]	H <sub>N</sub> [GEN.PL]
与	пяти	вкусны <u>х</u> ъ	ры <u>б</u> ъ	пяти	вкусны <u>м</u>	ры <u>б</u> ам
	{пяти	вкусны <u>х</u> ъ	ры <u>б</u> ъ}	H <sub>5</sub> [DAT]	D <sub>Adj</sub> [DAT.PL]	H <sub>N</sub> [DAT.PL]

この表8と先の表7を組み合わせると、'2'を含む数詞句の主格/対格形の形容詞に複数生格形が使用されるようになったプロセスがみえてくる。す

なわち、次の9表に示すように、双数に替えて複数形を使用するようになった斜格の影響と、‘数+生格’という数詞主要部型の‘5’以上の結合形式の類推によって、現代語のような結合形式が生じたと見るができるのである。ここで改めて、形容詞に複数生格形が現われたことの意味が注目されよう。双数消失の過程の中で‘2’と結合する名詞が単数生格と解釈されるようになっただけだったとすれば、これと一致すべき形容詞も同じように単数生格となるべく数詞句の構造が変わっても不思議はなかったはずである。しかし先にも述べたように、そのような例は検証されない。‘2’と結合する形容詞が斜格で早くから複数形になったことに加え、5以上の数詞句のパターンが援用されたのは、やはり‘2’それ自体が複数性の意味を持っており、双数形が失われていく不安定な状態においてはしばしば複数として解釈されたと考えるのが自然であろう。現代語では、名詞が女性名詞の場合、形容詞に複数主格のヴァリエーションが現われることは再三述べたとおりだが、このこともまた、多重解釈の段階で‘2’と結合する形式が複数主格であるという解釈が存在したことを強く示唆するものであろう。また、今日そのようなヴァリエーションが存在すること自体が、形容詞に関して言えば多重解釈の段階が完全に収束していないことを示しているということもできる。言い替えれば、形容詞が複数主格形で定着するという選択披もあったということだが、しかしロシア語ではそのような形には収束しなかった。

〈表9：形容詞の結合形の変化〉

	‘5’ の場合	‘2’ の場合	
OR 主格	пять <u>новых</u> [+PL][+G]	дѣва <u>нова(я)</u> столба	
生格	пяти <u>новых</u> [+PL][+G] столбовъ		дѣвою <u>нову(ю)</u> [+DU][+G] столбу
→ [+PL]		↓	дѣву(х) <u>новых</u> [+PL][+G] столбовъ
→ [+G] [+PL]		дѣва <u>новых</u> [+PL][+G] столба	↓
CSR 主格	пять <u>новых</u> столбов	два <u>новых</u> столба	
生格	пяти <u>новых</u> столбов		двух <u>новых</u> столбов



2. 5. 再解釈に始まって顕在化を経て現代語の定式に至るプロセスの中に '3' '4' を含む数詞句はどのように関係づけられるだろうか。

1. 2. で示したように、現代語では '3', '4' を含む数詞句の構成は '2' を含む数詞句とまったく同じになる。一方、古代ロシア語では '3', '4' を含む数詞句が主格/対格の場合、結合する名詞、形容詞は複数主格形をとった。これらの数詞句に含まれる複数主格形が '2' の場合と同じになるのは16世紀以降とされるが、17世紀の文献でも、複数主格形が現われる例が見い出され、この形式が安定するのはそれよりさらに後の18世紀以後と考えられる。

'3' '4' の数詞句の変化が '2' を含む場合との関連で生じたことは、これらの数詞の隣接性、出力形が同じであること、また、'2' ~ '4' の変化形の接近といった事実から考えて、疑う余地がないであろう。この最後の事柄については歴史文法の先行研究が随所で指摘していることだが、簡単にまとめると次のように言うことができる。すなわち、2. 1. でも述べたように、元来 '2' は指示代名詞と同じ限定辞型の双数変化、'3' は i-stem の名詞タイプ、'4' は子音語幹型の名詞タイプのそれぞれ複数変化をとった(表3参照)。ところで、早い時期(12世紀ころ)の文献から '2' の生格形に、本来の双数生格語尾 -ю をもつ дѣвою と並んで дѣву という形態が見い出される。双数カテゴリーが複数に吸収されていく過程の中で、この語尾形式は指示代名詞や形容詞の複数生格/前置格語尾 -хъ を獲得し、дѣвухъ という形になった。また '2' の与格、造格も双数の消失とともに双数変化のパターンから離れてこの дву- を語幹とする複数変化語尾を取るようになった。これと平行して '3', '4' の斜格にも, трьхъ → трехъ, трьмъ → трем; четырьхъ → четырех, четырьмъ → четырем のようなレベリングが進み、結局これらの数詞は同じ変化パターンをとることになった。このことが、これらの数詞が一つの緊密なグループをなすという意識を生み、'2' ~ '4' を含む数詞句が同じ構造を取る誘因となったというのである。このことを念頭に、'3' '4' を含む数詞句の結合パターンの変化を '2' を含む場合との関連で位置づけてみると、おおよそ26ページの表10のような図式を描くことができる('4' の場合は '3' と同じなので省略する)。

表の中段は '2' との結合形式が双数主格、単数生格、複数主格の三通りの解釈を持ちうる不安定な状態を示している。ここで中性、女性の名詞の形式(ここでは中性 -а, 女性 -ы 語尾)は '3' の複数主格と一致する。従ってこの段階から先の発展として、Q+[?]の空位置には、'3' と結合する場合の[NOM. PL]が入るか、あるいは '2' との結合から生じる[GEN. SG]が入るかのどちらかという

〈表10：3を含む数詞句の変化〉

		M	N	F
OR	3 + [NOM. PL.] 2 + [NOM. DU]	три столбы два столба	три села дѣвъ селѣ	три рыбы дѣвъ рыбѣ
→	2 + $\left\{ \begin{array}{l} \text{[NOM. DU]} \\ \text{[GEN. SG]} \\ \text{[NOM. PL]} \end{array} \right.$	$\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\}$ два столба	$\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\}$ два села	$\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\}$ две рыбы
→	Q + [?]	?	-а	-ы
CSR	Q + [GEN.SG]	два столба	два села	две рыбы

ことになる。前者の場合には「3 + 中性／女性複数主格」が再解釈の出発点となり、ここから「2 + 中性／女性複数主格」→「2 + 複数主格」というように顕在化されたはずであり、男性名詞の最終的な出力形も \*два столбы, \*три столбыのようになったはずである。実際に、このような変化をたどった方言もあるが(RD：179。例えば три *малчики* [NOM. PL. M] 「三人の少年」), 標準語はこの選択肢を選ばず、'2'との結合から生じた単数生格形のほうを選択したのである。

### 3. まとめ

'2'～'4'が多重解釈の状況から単数生格名詞との結合に収束していくプロセスにかかわる事象としてもう一つ、-á 語尾をもつ複数主格男性名詞を挙げることができる。現代語ではこの語尾が急速に拡張しているというが、この語尾の出現は比較的新しく、通常は16世紀頃に用いられ始め、17世紀以降に普及するとみなされている。その由来にはいくつかの説があるが、筆者は“два + N-a”に現われる N-a 形であると考える。この問題は稿を改めて検討したいところであり、ここではただ、2節で述べた事象との関連から、次のことを示唆するにとどめたいと思う。双数消失から'2'～'4'に結合する形式が単数生格と解釈されるまでの間には、多重解釈の状態があったと推測できる。古い N-a 双数形は、双数主格形と単数生格形という解釈の間で揺れていたわけだが、この形式と同じ環境に現われる中性／女性名詞は“複数主格”という解釈の余地もっていた。すると、N-a 形は'2'～'4'の数詞句との結合という環境から出発し、今度はそれまで持たなかった“複数主格”形のヴァリエーションという意味に

再々解釈され、'2'～'4'との結合という環境から離れて単独に用いられるようになったと考えられる。つまり、先の表10の多重解釈の段階からさらに、次の表11に示されるような発展を遂げたのではないかとの推測がたてられるのである。

〈表11: -á 語尾男性複数主格形の現われた背景〉

2 + $\left\{ \begin{array}{l} [\text{NOM.DU}] \\ [\text{GEN.SG}] \\ [\text{NOM.PL}] \end{array} \right.$	$\left. \begin{array}{l} \text{два столба́} \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} \text{два села} \end{array} \right\}$	$\left. \begin{array}{l} \text{две рыбы} \end{array} \right\}$
$[\text{NOM.PL}] \equiv [\text{GEN.SG}]$ → $[\text{NOM.PL}]$	столба́	села	рыбы

本稿では、再解釈, 顕在化, 多重解釈という考えを軸に、ロシア語の数詞句の変化を考察した。再解釈は一連の変化のきっかけとして重要な要因となる。しかし実際には、最終的な出力形——我々が共時的研究の対象とするような構造——に至るまでの間には、その顕在化、そして多重解釈の状態が存在することを示した。

数詞'2'～'4'の結合パターンの最終的な出力形が“単数生格名詞”となったことは、今日では明らかである。それは今日の規範がたとえば два села́ [GEN. SG] であって \*два села́ [NOM. PL] ではないことによって示される。本稿で述べたように、これらの数詞句が主格/対格の場合、結合する名詞がたとえば複数主格形になりうる可能性は十分あったのである。しかしロシア語では、少なくとも現代ロシア語の標準語の基盤となったモスクワ方言では、その選択肢は取られなかった。それが必然的であったのかどうか証明は難しいが、おそらくは次のような理由を考えることができるであろう。まず、ロシア語では男性名詞において古い双数形と同形の N-a 形が比較的良く保持されたという事実がある（ではなぜ『比較的良く保持されたのか』という問いはさしあたり棚上げにしておく）。もし双数全般の消失の中でこの形式が早々に廃れていけば、再解釈の生じる基盤は当然失われ、単数生格という解釈が現われることはなかったはずである。これはウクライナ語やベラルーシ語の場合が示している。さらに、2.5. に述べたように'2'～'4'の変換形が統合されたことによって、元来

は、それぞれ異なる変化タイプに属した限定辞であった‘2’、‘3’、‘4’が『数の概念を表すグループ=数詞』という一つの語彙範疇を形成するようになったことが挙げられる。これは必然的に、元来名詞であり数詞句においては常に主要部であった‘5’以上の数詞との連合を強め、全体として（少なくとも主格/対格形においては）数詞主要部型の数詞句という解釈を生み出したと考えられる。主格数詞句で数詞が主要部であれば、これに直接後置される名詞句は、同格でなければ、主要部でも主格でもあるはずはなく、残された解釈は、通常の名詞に直接後置される生格名詞と同じ構造格の要素ということになる。ここから、多重解釈の可能性のうちの一つ、つまり‘2’～‘4’と結合する名詞の“複数主格”という解釈の可能性は排除されていくことになるだろう。一方、近代ロシア語成立のプロセスの中で、名詞変化、特に複数の変化は大きなパラダイム編成の転換を体験していった。複数カテゴリーにおける文法的性の対立の中和という傾向は、名詞全体的な変化形のみならずアクセント体系にも影響を及ぼし、その結果多くの中性名詞、女性名詞が単数と複数で異なるアクセント位置を持つパターンになった。2.4.2.で言及したような、複数主格と単数生格の関係が不透明になる状況が次第に排除されていったのである。こうして数詞という語彙範疇が形成され、これに結合する名詞が生格であるという解釈が定着し、また複数主格と単数生格のアクセントによる差異化が進行していく中で、「‘2’～‘4’+単数生格」が唯一の可能な解釈として残ったのであろう。

## 注

- [1] reanalysis は直訳すれば「再分析」であるが、既成の形式を解釈し直すというこの用語の意味に鑑みて「解釈」を用いた。reinterpretation という用語も reanalysis と同義的に使用される。

## 文 献

- Ананьева Н.Е., *История и диалектология польского языка*. МГУ. 1994.  
 Борковский В.И., Кузнецов П.С., *Историческая грамматика русского языка*. М.: Наука, 1965.  
 Горшкова К.В., Хабругаев Г.А., *Историческая грамматика русского языка*. М.: Высшая школа, 1981.  
*Древнерусская грамматика XII-III вв.* (本稿中 DRG) Российская Академия Наук. М.: Наука, 1995.

- Кузнецов П. С. (ред.), *Русская диалектология*. (本稿中 RD)  
М.: Просвещение, 1973.
- Русская Грамматика*. I, II (本稿中 RG). Академия наук СССР. М.:  
Наука, 1980.
- Чернов В. А., *Русский язык в XVII веке. Морфология*. Красноярск, 1984.
- Филин Ф. П., *Происхождение русского, украинского и белорусского  
языков*. Л.: Наука, 1972.
- “Хождение за три моря Афанасия Никитина 1466–1472 гг.”. Троицкий  
Список конца XV–начала XVI в. Издательство АН СССР, 1958.
- Babby L., “Prepositional Quantifiers and the Direct Case Condition in Russian”  
*Issues in Russian Morphosyntax*. Slavica, 1985, pp 91–117.
- Bailey J., “Remarks about the Preservation of Archaic Stressing for Some Nouns  
in Russian Folk Songs.” *IJSLP* 1982, XXV/XXVI, pp 65–76.
- Comrie B. & G. Corbett (eds.), *The Slavonic Languages*. Routledge, 1993.
- Franks S., *Parameters of Slavic Morphosyntax*. Oxford, 1995.
- Harris A. & L. Campbell, *Historical syntax in cross-linguistic perspective*. Cam-  
bridge UP. 1993.
- Šewc-Schuster H., *Gramatika hornjoserbskeje řeči. fonologija, fonetika, morfolo-  
gija*. Domowina, 1984.
- Shevelov G., *The Syntax of Modern Literary Ukrainian. The simple sentence*.  
Mouton, 1963.